

第9分科会 資料保存

ここからはじまる資料保存

—未来に残し、伝えるために—

基調報告 なぜ残し、どう残すのか—資料保存・修理

の基本的な考え方と手法—

眞野節雄（日本図書館協会資料保存委員会委員長・

東京都立中央図書館資料保全専門員）

事例報告 埼玉県立図書館の資料保存—ゼロからの取

組—

神原陽子（埼玉県立久喜図書館）

事例報告 一橋大学における西洋古典資料保存の取組

—ただ古いだけではない—

床井啓太郎（一橋大学社会科学古典資料センター）

ワークショップ 修復に使う和紙を触ってみよう



資料保存委員会は今回、基本に立ち返り、信頼性が高く適切な管理を行えば長期保存に適した素材である「紙」の保存をテーマに設定した。

まず基調講演として、眞野節雄氏（日本図書館協会資料保存委員会委員長／東京都立中央図書館資料保全専門員）が資料保存の基本的な考え方を解説した。図書館に

おける資料保存は、「利用」か「保存」かではなく、「利用のための保存」でなければならない。資料保存＝修理と誤ってしまいがちだが、予防、点検、代替、修理、廃棄といった方法から選択し、組み合わせて行う。最も重要なのは「修理」よりも「予防」である。修理をする場合は必要最小限の手当てにとどめ、再修理の可能性も考えて可逆性を意識する。破損部分を強固にしようとする他の部分に負担がかかって逆に壊れやすくなるので、柔らかく仕上げる。

最後に、東日本大震災で被災した陸前高田市立図書館の郷土資料の救済・修復作業に携わった経験から、資料保存は単に資料を保存するだけでなく、それを集めてきた人々の思いを引き継ぐことであると述べ、技術と知識の根底に「残したい」という思いを持つことの大切さを訴えた。このまとめは奇しくも今大会記念講演のまとめと一致し、人々の記憶がコミュニティである、我々が継ぐものは単なる資料ではなく人々の記憶である、ということを改めて感じさせ、会場に感動が広がった。



続いて、公共図書館と大学図書館から2つの事例報告をいただいた。神原陽子氏（埼玉県立久喜図書館）は、組織もないところから始めて資料保存に取り組んできた歩みを報告した。利用中心で保存への認識が薄かった県

立図書館の中で、継続的な資料提供のために、「図書資料整備計画」を策定した。補修マニュアルの作成や技術研修、広報・普及活動を基礎に、館の移転や統合、カビ発生への対応などの場面で実績を重ね、それが評価されて組織的な保存につなげていった。この報告は、専任職員や部署、予算がなくても資料保存は始められると、参加者を力づけた。



床井啓太郎氏（一橋大学社会科学古典資料センター）は、センター内の保存修復工房を拠点に行っている、保存修復や環境整備などの取り組みを紹介した。職員の少ない専門図書館で、資料がただ古くて貴重というだけでは予算がつかない中、資料原本の保存がなぜ必要かが理解されなければならない。「資料」の専門家はたくさんいるが「そこにある資料」の専門家は図書館員だけである。図書館員が主体的に行動することが重要と述べた。



最後に、資料保存委員会委員によるワークショップ「修

復に使う和紙を触ってみよう」を行った。参加者に楮100%の和紙サンプル（4種類）を配布し、修復に適した和紙の厚さ、和紙の繊維の活かし方（切らずにちぎる）、「紙の目」などを体感してもらい、好評であった。書道の半紙ではダメかとの質問には、眞野氏から、半紙には様々な素材が使用されており、修理用としての品質に信頼性がないので避けるべきであると回答された。

今回はテーマ設定の際の予想を越えて幅広い館種から94人もの参加があった。アンケート結果も、具体的な話が「大変参考になった」、資料保存の考え方が「目から鱗でした」等、大変好意的だった。

この分科会が、これから資料保存に取り組もうとする館の背を押すきっかけとなることを願っている。